

12. 近代移行期の秩序意識(2) — 民衆宗教の登場と「信教の自由」

2025. 7. 3. 大橋 幸泰

はじめに

近世の宗教／民衆の「現世安穩・後生善処」への願望を満たしたか？

→近世秩序から逸脱する宗教活動の存在／近世後期～末期、顕在化／たとえば、豊田みつきの活動

*本日は、近代移行期(19C)に、その延長線上に登場した民衆宗教と明治政府の「信教の自由」論を検討

1. 民衆宗教の特徴

| | 開教年 | 教 祖 (生没年) |
|-----|---------------|-----------------------------|
| 如来教 | 享和 2 年(1802) | 一尊如来きの(1756 ~ 1826) |
| 黒住教 | 文化 11 年(1814) | 黒住宗忠(1780 ~ 1850) |
| 天理教 | 天保 9 年(1838) | 中山みき(1798 ~ 1887) |
| 金光教 | 安政 6 年(1859) | 川手文治郎〈赤沢文治、金光大神〉(1814 ~ 83) |
| 丸山教 | 明治 3 年(1870) | 伊藤六郎兵衛(1829 ~ 94) |
| 大本教 | 明治 25 年(1892) | 出口なお(1836 ~ 1918) |

a. 一神教的信仰

民間に流布している神々を前提に、中核となる神の抽出 or 再定義

→一神教的信仰として洗練

*まったく新しい神格の創作というよりも、既存の民間信仰・流行神との葛藤を経て、成立した神格

→従来の神々では救われない、との強烈的な認識／既存秩序への批判精神

b. 「生き神」思想

人間は「神の子」：神の心をわが心として向上する志向性を持つ

→民衆の尊厳回復を志向

権力や既存秩序への鋭い批判、人間の平等性、人類的普遍性の主張

*世直し意識をともなう民衆運動と通底／天皇(現人神)を基軸とした明治国家と対立

2. 天理教教祖中山みきの場合

1798 年大和国三昧田村庄屋前川家に生まれる

13 歳で庄屋敷村庄屋中山善兵衛と結婚、16 歳で姑から中山家の経営管理を譲渡される

→結婚後、夫の浮気と家の重責で自己犠牲を強いられる

→一男五女の子どもの内、2 人の娘の死亡、長男の足の病気、という不幸

→修験道(山伏)の寄加持の際、加持台となり、神がかり状態を経験(1838、40 歳)

→以後、しばしば神がかり／社会変革への期待

=通俗道徳の真摯な実践によっても、幸福が望めない既存の体制・秩序を痛烈に批判

*安丸良夫氏の通俗道徳論

- ・通俗道徳の真摯な実践によって平穏な生活を求める民衆の平凡な理想が、現実の生活の中では実現しないことが明らかになったとき、「民衆はみずからの理想を支配のイデオロギーから分離して表現するために宗教という媒介を必要とした」。

3. 19世紀の宗教運動と「信教の自由」論

19世紀に登場した宗教運動の双生児

a.民衆宗教：人間としての尊厳の回復を志向／既存秩序を批判する世直し願望の表現形態

b.国家神道：国家としての危機回避を志向／江戸時代後期以来の国学の隆盛の延長線上に成立

*両者とも、既存秩序への批判を展開／しかし、個人の救済を重視するか、国家の救済を重視するか、で根本的に差異が存在

明治政府は当初、神仏分離を進めつつ、神道の国教化を企図

→政府の方針に後押しされて、在地の国学者・神職が廃仏毀釈の運動を展開

→しかし、神道の国教化は失敗

*理由／①神々の多様性、②真宗門徒や浦上キリシタンの抵抗

→ただし、神道の優位性まで放棄されたわけではない／1880年代までに、神道は非「宗教」であるとの見解が登場／その背景に、religion = 「宗教」のモデルはキリスト教、との観念

→政府は、あらゆる「宗教」に優越する国家儀礼(国民道徳)としての国家神道を成立させる(190末)とともに、民間信仰・流行神・民衆宗教を、未開の象徴 = 「淫祠邪教」として抑圧

→あらゆる宗教活動に対して国家神道を優越／国家神道の枠組みから逸脱しない宗教のみを容認／これが明治憲法の「信教の自由」の内実

4. 民衆宗教の変容

既存秩序への批判を内包する民衆宗教／明治維新後、天皇権威を補完する神道説(→国家神道)との確執

→「淫祠邪教」として、国家による厳しい弾圧を経験

→教祖の次の世代は、公認宗教への道を模索／教祖は否定的であったため、存命中は実現せず

→国家神道の枠組みの中へ、教義をすりあわせる

*公認宗教として認められるのと引き替えに、既存秩序への批判的精神は封じ込められる

5. 「日本人は無宗教」か？

「宗教」という訳語／西洋文明の象徴としてのキリスト教をモデルとした概念／歴史的産物

* religion の訳語：「宗旨」「宗門」(practice系)か、「教法」「宗教」(belief系)か／明治初期、自明ではなかった／近世では、「宗教」は「仏の教え」「究極の真理」を意味する仏教語／仏教関係者が使う特殊な言葉／一般の近世人にとってなじみのある語は、practice系の「宗旨」「宗門」／宗旨改、宗門改

→「日本人は無宗教」という認識／近代的(西洋中心的)価値判断

*西洋社会の常識を通じて東洋社会を規定(E.W.サイード『オリエンタリズム』)

しかし、だからといって「宗教的なもの」を「宗教」以外の言葉で言い表すのは難しい

→宗教とは：「人間がその有限性に目覚めたときに活動を開始する、人間にとってもっとも基本的な営み」(阿満利磨『日本人はなぜ無宗教なのか』205頁)

人間の力が及ばないものへの畏怖：前近代の日本列島では、practice系・belief系を問わず、存在
→ 19C後、文明化・近代化の推進の過程で、「宗教」の理解がキリスト教をモデルとしたbelief系に傾斜
→ practice系活動を貶める契機

「無宗教」という自己認識の危うさ

a. 西洋中心主義の再生産

b. 人間の力への過信

→ 歴史における宗教の問題を考える重要性

おわりに

近代(現代)の民衆は解放されたか？

* キリシタン禁制という宗教政策を念頭に置くと、一見、近代の方が解放されたかに見える／しかし、実際には、近世期、潜伏キリシタンなど禁制宗教を含めて多様な宗教活動が展開

→ 近代天皇制のもとで、神仏習合の否定、神仏分離の強行／国家神道の優位性に対して、「淫祠邪教」と見なされた宗教活動は徹底的に排除・弾圧された

* 近世の方が自由だったという意味ではない／それぞれの時代には、それぞれの拘束性がある

【参考文献】

安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』（青木書店、1974年〔平凡社ライブラリーに1999年再刊〕）

安丸良夫『神々の明治維新』（岩波書店、1979年）

桂島宣弘『幕末民衆思想の研究―幕末国学と民衆宗教 増補改訂版』（文理閣、2005年）

小沢 浩『生き神の思想史―日本の近代化と民衆宗教』（岩波書店、1988年）

小沢 浩『民衆宗教と国家神道』（山川出版社、2004年）

小沢 浩『中山みき』（山川出版社、2012年）

E.W.サイード『オリエンタリズム』（平凡社、1986年〔原著は1978年刊〕〔平凡社ライブラリーに1993年再刊〕）

阿満利麿『日本人はなぜ無宗教なのか』（筑摩書房〔ちくま新書〕、1996年）

磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜―宗教・国家・神道』（岩波書店、2003年）

大橋幸泰『近世潜伏宗教論―キリシタンと隠し念仏』（校倉書房、2017年）

【付 記】

・ 明日までに、Hoppiiieにて講義記録の提出を求める。

・ 小レポート提出期限 2025年7月9日：小レポートを提出した者が試験(7月17日)の受験資格を有する。